

第13回 コーディネーターという仕事 ①

コーディネーターをご存知ですか？

今回のテーマは、移送団体におけるコーディネーターです。全腎協の通院介護支援事業団体に限らず、移送活動を行う団体にはコーディネーター（移送サービスコーディネーター）と呼ばれる人がおり、移送活動を安全かつ円滑に行うための各種調整を行っています。では、具体的にコーディネーターは日々どのような仕事をしているのでしょうか。

早速、コーディネーターの仕事を見ていききたいと思います。今回は特別に実際のコーディネート業務をより具体的にお伝えするため、北九州「さわやか」のコーディネーター高原由美さんからお話をうかがっています。高原さんのお話を中心にコーディネーターの仕事ぶりをみていきましょう。

コーディネートとは“つなぐ”仕事

スムーズに移送活動が行われるためには、いつ、誰が誰を、どこからどこまで運ぶのかを事前に取り決めておく必要があります。取り決めは、利用者と運転ボランティア双方にとって無理のないものでなければいけません。そのためには、利用者のニーズとボランティアの活動可能な範囲をあらかじめ把握した上で、誰が誰を運ぶのかを慎重に決めていく必要があります。この利用者とボランティアをつなぐ作業こそが、コーディネーターの仕事です。具体的には、利用者の状況把握、車両や運転ボランティアのスケジュールづくりが主な業務となります。

基本「ボランティアに無理させない」

では、北九州「さわやか」で高原さんは実際にどのようにコーディネートを行っているのでしょうか。利用者ボランティアを組み合わせる基準について、高原さんは「移送を行う時間帯や利用者ボランティアの住所、病院の所在地を基準にコーディネートを行います。可能な限りボランティアは着発点（利用者自宅・病院）の近くに住んでいる人とし、なおかつ活動可能な時間と移送時間帯が合う人同士を組み合わせます」と言います。

しかし、高原さんは時間帯や住所だけを基準に機械的に組み合わせを行っているわけではありません。高原さんのコーディネートは、利用者がドア・ツー・ドアの移送に対応できるかを確認するところから始まります。「ボランティアさんは介助を行わないので、まず、利用者さんが歩いて車に乗れるかどうかをご家族や病院の方に確認しています。また、一人のボランティアさんが一日に同じ利用者さんの往復の送迎を担当しないようにしています。これはボランティアさんにストレスをかけないためです。」送迎活動がボランティアの負担にならないよう、高原さんは細心の注意を払います。そこには経験に基づく明確な理由がありました。「ボランティアさんの活動は、ご本人がちょっと少ないと感じるくらいの量がベスト。それが長く活動してもらおうためのコツなんですよ。」（続く）

次回は…

コーディネーターという仕事 ②